

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐藤正則

論文題目 ボグダーノフと〈新しい人間〉の創造—ボリシェヴィズムの人間観と宇宙観—

本論文は、1905年頃から1920年代初頭にかけて、ボグダーノフら一部ボリシェヴィキが抱いた人間観と宇宙観の特徴を明らかにし、その思想が同時代の西欧の知的潮流とも密接な関係にあったことを解明したものである。従来のボリシェヴィズム研究では、専らボリシェヴィキの政治、経済面での政策に焦点が当てられ、ボリシェヴィキの代表としてはレーニンのみが研究対象とされる傾向があったが、本論文は、そうした従来の研究では軽視されてきたレーニン以外のボリシェヴィキの思想、特に、社会政治制度の変革のみならず、全く新しい世界の構築や新しい人間創造さえも目指したボグダーノフらの思想の重要性を指摘し、思想の源泉とその実践の具体例を鮮やかに示した、新しいボリシェヴィズム研究として画期的な力作である。

本論文の構成は、序論、研究史、本論3章、結論と展望から成り、注を除く本文は400字詰原稿用紙換算約630枚である。

序論では、本論文の課題が述べられている。それは、第一に、ボリシェヴィズムの人間観と宇宙観の特徴を明らかにすることであり、第二に、それを踏まえてボリシェヴィズムを20世紀の西欧を含む思想史の文脈で把握することであると、具体的な検討対象は、ボグダーノフの思想と、ボリシェヴィキが1920年代初頭までに行った〈新しい人間〉の創造を目指した実験であることが明確に示される。次に、「研究史」では、従来のボリシェヴィズム研究を整理した上で、その問題点、不足点が指摘される。

第一章では、ボリシェヴィズムの生れた思想的背景が述べられる。ボリシェヴィキは、物心・主客二元論、機械論、決定論、個人主義などの近代的な知のあり方の打破を目指していたが、その際、当時西欧に生じつつあった新しい哲学、科学——例えばマッハの哲学などを導入することで自らの思想体系を確立した。一方、ボリシェヴィキは、当時のロシアの観念論、宗教思想、象徴派、「ロシア・コスミズム」の宇宙論などとも盛んな交流、論争を行っていた。ここでは、ボリシェヴィズムの思想の源泉が、20世紀初頭の西欧の知的潮流とロシア精神史の双方の中に探求されているが、特に西欧の思想史との関連づけは新しい試みであり、成功している。また、レーニンとボグダーノフは、従来その対立点のみが強調されてきたが、双方が当時の西欧の知的革命に対して、マルクス主義の側から一定の解決策を提示したという点では共通性を持っていたという指摘は、レーニン思想の新解釈としても重要なものである。

第二章では、ポリシェヴィズムの人間観と宇宙観の代表として、ボグダーノフの思想を検討し、彼の多様な活動に一貫して見られる特徴として、次の四点を指摘している。1. 自然に対する人間の積極的能動性、すなわち労働実践を世界観の根底に置いていること。(ボグダーノフはマッハ哲学の影響下にあり、世界は「経験の要素」から成ると考えていたが、人間の全ての実践は「要素の組織化」であり、人間はこの組織化機能によってカオスである自然と闘争する。) 2. 共同主観的世界観と集団の創造性の強調。(物理的世界は、社会、集団の協働によって造られるものであるが、そればかりでなくボグダーノフは、人間のあらゆる精神活動もすべて社会的なプロセスの中で構築されるものであると考える。このような共同主観的世界観に基いて、個人主義を批判し、集団の創造性を強調する。) 3. 人間と宇宙の進化の理論と新しい人間の創造。(ボグダーノフは、人類の社会的協働によって人間と宇宙が進化するという独特の宇宙進化論を構築しているが、彼の考える新しい人間とは、「集団主義的人間」であった。) 4. 人間の感性、身体性を重視する人間観。(ボグダーノフは、新しい集団主義的人間の創出のためには、人々が感情面、身体レベルでの経験を共有することが不可欠であると考えた。)

以上の四点は、プロレトクリト文化運動から血液交換実験まで複雑多様なボグダーノフの活動を貫く彼の思想の特性として、的確に選ばれたものであり、ボグダーノフの世界観がこの特性を通して明快に整理され提示されたものとして評価できる。

第三章では、ポリシェヴィキが 1905 年から 1920 年代初頭に行った様々な実験を取り上げて、それらに共通した特性が示される。検討の対象となる実験は、人々の集団的創造のエネルギーがついには不死をも獲得するという信念の下に社会主義的宗教を創ろうとした「建神主義」、テーラーシステムの大規模な導入による機械と人間の一体化を目指した「労働の科学的組織化」運動、プロレタリア文化建設運動である「プロレトクリト」による群集劇やプロレタリア詩などである。これらはいずれも新しい集団主義的な人間を創造するという性格をもつ。しかも、それは、第二章であげられたボグダーノフの思想の特性を悉く映し出すものでもあることが検証されてゆく。この第 3 章では、ポリシェヴィズムの実験の具体例を豊富に提示しつつ、それが単なる事実の羅列に終ることなく、ボグダーノフにも共通する特性が抽出されてゆく手法が鮮やかである。

結論部では、ボグダーノフとポリシェヴィズムの思想の特徴とその 20 世紀的特性が総括され、さらに、今日ではもっぱら否定的な意味合いでしか用いられなくなった「集団主義」という言葉について、彼らが目指したそれは、決して個人が集団に埋没するものではなく、完全な相互理解の下に個人が自覚的に集団の一員となる理想社会であったことが確認された上で、今後の研究課題として、ポリシェヴィズムの世界観とスターリン主義イデオロギーの関連性についても触れられている。

以上のように、本論文は、西欧も含む 20 世紀初頭の思想史の大きな思潮の中に、ポリシェヴィズムの思想を位置付け、その思想の具体的な実践例も紹介しつつ、新しい社会、政治のみならず新しい人間、宇宙をも創出しようとした、ポリシェヴィズム思想の従来明

らかにされていなかった特質を、豊富な資料に基づき綿密に解明した、極めてスケールの大きい、多くの新しい知見に満ちた論文である。

勿論、審査委員から若干の不十分な点が指摘されたことも事実である。その一つは、スケールの大きさに起因する問題であり、ボリシェヴィズムとボグダーノフという二つの巨大なテーマを扱っているため、そのどちらに関しても必ずしも全貌を伝えているとは言い難いという点である。また、もう一つは、本論文のオリジナルな功績の一つである、ボリシェヴィズムと同時代の西欧思想との関連への言及に重点が置かれたあまり、ロシア精神史との繋がり、影響関係に関する叙述が少なすぎたのではないか、という指摘であった。

しかし、これらの欠点は、本論文の価値を大きく損なうものではなく、本論文は、その表題にふさわしい内容と水準を有し、従来研究の光が当てられることの少なかった一部ボリシェヴィキの思想の意義を 20 世紀思想史の文脈の中で明らかにし、ボリシェヴィズム研究に新たな地平を拓くものである。よって、博士（学術）の学位を授与するのに十分な業績である、と判断する次第である。